

# 今年の研究課題

公文俊平 (GLOCOM所長)

私がかねがね、トフラー流の、情報革命ないし情報化を第一の波(農業革命)と第二の波(産業革命)に続く「第三の波」とする見方には懐疑的で、むしろ近代化の中の第一(軍事化)と第二(産業化)の波に続く第三の波とする視点から『情報文明論』(1994年、NTT出版)を書いた。その編集者の島崎到一さんは、それを「ネオモダン」論と位置づけてくださり、私もなるほどと思った。しかし、東浩紀さん(GLOCOM主任研究員)の卓抜な「ポストモダン」論に触発された後では、それを「ラストモダン」論と呼びたくなった。

東さんは、ポストモダンの現代では、近代が作り上げた虚構としての「国民国家」の「大きな物語」は崩壊して、知識は断片化しデータベース化され、人々は知識のデータベースの消費に向かうという。この議論はとても興味深いが、多少の異論が残る。すなわち、

1)大きな物語は、一つでなく複数ある。近代社会は、国民国家だけではなく、産業社会の大きな物語も産み出した。情報社会の大きな物語もやがて書かれるのではないか。

2)それらはまったくの虚構ではなく、かなりの程度、とりわけ近代化の先発地域では、そこに生起ないし創発した「新しい現実」の、形象化や理論化の結果として生まれたのではないか。

たとえば近代初期の西欧に生まれた国家イメージ、すなわち内には絶対君主に仕える臣民がいて、外には各国が国威の増進・発揚を求めて互いに戦うなかで国家間の「勢力均衡」が実現するという物語は、まさにそれではなかったのか。同じことは、産業革命時代に普及したマンデビル=スミス流の、私利の追求は「神の見えざる手」の働きで公共の利益となる市場均衡をもたらすという物語についてもいえよう。

第三に、現実もそれに基づく物語も、時間と共に進化する。現実の反映として生まれた物語が「虚構」—— というよりは「仮構」—— となるのは、不完全な現実に対する完全な理念が共通知識となって、規範としての意味をもち始める場合、とりわけ近代化の後発地域で、それが実現されるべき理想ないし実現可能な目標として共通予想となる場合ではないか。そして、「現実」がさらに変化して過去の「仮構」としての理念や目標が現実性を失った場合には、その「虚構」性が暴露され、虚構の「脱構築」が起るのではないか。

西欧では、国家間の戦争は放置すれば覇権国の支配を許すおそれがあるために、「勢力均衡」は意図的な同盟政策を通じて政策的に追求・実現さるべきだという共通理解が生まれた。国内では、「国民」が主権者として国家を支配し、公正で平等な統治を構造的・政策的に実現していくべきだとする民主主義的国民国家の理念が通有されるようになった。同様に、自由競争は独占をもたらす一方、市場均衡は好況と恐慌の循環を通してしか実現しないことが理解されると、反独占や反循環、さらには富や所得の再分配をめざす制度や政策の採用を通じて、政府と市場が相互補完する理想的な産業社会を作ろうとする(民主)社会主義的な理念が、多くの人々の共感を集めるようになった。そしてさらに今日では、地球上のすべての地域に近代的な民主主義政治体制や社会主義的経済体制を押し広げることは、そもそも不可能—— だから「文明の衝突」は不可避—— なのではないかという疑念ないし諦念が、急速に共通知識化しつつあるようだ。

しかし問題は、近代化に失敗した地域だけにあるのではない。近代化の先発地域でも、政府と市場の幸福な結婚はありえず、両者は「文化的矛盾」を孕みつつ辛うじて共存していくしかないという悲観論が見られる。それに対する一つの救いは、近代化の第三の波としての情報化が、この矛盾・対立の媒介項となってくれるという期待だが、それに応える新しい現実はまだ生まれてもいず、それを反映した新しい大きな物語も書かれていない。

しかし、私としてはそこからいきなりポストモダンに飛ぶのではなく、あらためて情報化の「ラストモダン」としての可能性を探ってみたいと思う。さまざまな問題を残しつつ、発生させつつも、情報化は、近代文明に有終の美をなさしめられるのではないか。それは、これまでの「公」と「私」に対する「共」とでも呼ぶべき、ある積極的な原理や領域を付け加えて新しいグローバルな構造や秩序を創発させることで、近代文明をより謙虚でしなやかな文明に進化させる可能性をもっているのではないか。そうだとすれば、それを支える新しい現実はどこでどのように生起しつつあるのか。それらはどのような「大きな物語」として統合され形象化されていくことができそうか。

私は、ここに今年の研究課題を求めたいと思う。